

指導者失格の幸徳秋水

辻野功

はじめに

「棺を蓋うて後事定まる」とか「人事棺を蓋うて定まる」と言われる。その人の評価は棺の蓋われ方、すなわち死に方によって大いに左右される。処刑、暗殺、自殺などのような劇的な死に方をした政治家、革命家、思想家などの棺を蓋うて後の評価は、やはり高くなりがちである。

関東大震災に際して甘粕正彦憲兵大尉に殺害された大杉栄の評価にもその傾向なしとしないが、本稿で取り上げる幸徳秋水の評価はその最たるものである。もし彼が一九一〇（明治四三）年の大逆事件からの中途離脱が成功して事件に連座していなかったら、どうであろうか。彼は病弱——公式には腸カタル、実際は結核——であったので、長生きはできず、病床を離れられず四面楚歌のまま死んだであろう。もし彼がそのような棺の蓋われ方をしたならば、全集が出され、何冊もの評伝が書かれるなどして、他の明治の社会主義者とは比較にならないほど研究され、高く評価

されるようなことはなかったであろう。

誤解を恐れずに言えば、彼は死刑になって幸いであった。人間はどうせ一度は死ぬのである。そうであってみれば、幸徳にとって大逆事件での刑死は最高の死に方であった。大逆事件で宮下太吉や管野スガらが死刑になったのに、もし彼だけが死刑を免れたとしてみよ。運動の指導者としての面目が問われるところではない。我身の保身のために、敵前逃亡を図って死刑を免れた卑怯者として歴史に汚名を残したに違いない。

彼は運動の指導者としては、どうにも弁護できない欠陥を持つ人間であった。その欠陥にもかかわらず今日も彼が高く評価されているのは、死刑になったからである。本稿は社会主義運動の指導者としての幸徳秋水の女性問題を中心とした欠陥を論じようとするものである。

『くノ一忍法帖』や『甲賀忍法帖』で有名な作家の山田風太郎の「明治もの」の一つに、「四分割秋水伝⁽¹⁾」というのがある。これは「上半身」「下半身」「背中」「大脳旧皮質」に四分割して、幸徳秋水を論じたものである。「上半身」とは「当人が世にそう見せかけているタテマエの姿」であり、「下半身」はセックスなど人間のもっとも弛緩した凡俗の姿である。「背中」とは意外に本音が見られる「逆の反面」であり、「大脳旧皮質」は「本音以前の原始深部の声」である。人を論ずる場合えてしてその人の「上半身」のみを論じがちだが、山田風太郎は四分割して論じて初めてその人の全体像がつかめるとするのである。「背中」と「大脳旧皮質」から見た幸徳像はあまり成功しているように思えないが、「上半身」と「下半身」の幸徳分析は見事である。

四分割はともかく、「上半身」と「下半身」、公生活と私生活、タテマエと本音を統一的にとらえないかぎり、その

人物の正しい評価とはならない。幸徳のように「下半身」の問題が「上半身」に致命的な影響を及ぼした場合には、なおさらである。

しかるに従来の幸徳研究は、彼の「下半身」の問題を無視したり切り捨てたりして、「天皇制に立ち向かって倒れた殉教者」あるいは「天皇制の暗黒裁判によって死刑に処せられた革命家」として称揚されてきた。しかし幸徳秋水はそれほど立派な人物であつたらうか。

美人至上主義者幸徳秋水

『朝日新聞』一九八三年七月一三日号社会欄は、「幸徳秋水の『忘れ形見』小谷ハヤ子さん死去」と写真入りで報じた。幸徳秋水を少しは研究したことがある私も、この記事を見て、「はて、幸徳に子供がいたのか？」といぶかった。幸徳秋水の妻だった師岡千代子が、その回想記の中で「秋水には真実に子供がなかったのかと訊かれるが、秋水に子供がなかったことは事実である」と書いて⁽²⁾いることもあり、幸徳の血を引く子供がこの世にいたとは思ってもみなかったからである。しかし「小谷さんは、秋水に離縁された最初の妻、横田ルイさんが世間から隠れるようにして産んだ子ども。『大罪人の娘』の汚名を背にひっそりと生きていた。しかし『大逆事件』そのもののえん罪性が強く、子や孫に励まされて、去年七月、初めて出生の秘密を明らかにし……」を読んで、「ああそうか」と初めて納得した。幸徳秋水の一八九六(明治二九)年の最初の結婚について、刎頸の友だった小泉三申(当時新聞記者、後に政友会代議士)は、次のように述べている。

其時分の秋水の所得は多くとも二三十円を出まい、下女を雇う余裕もないので、母親と二人暮しであったが、孝心深き彼としては、老いたる母に薪水の労を執らせるのが心苦しくもあつたらうか、福島県の三春辺から、旧久留米藩士某の女を迎へて結婚した。其新夫人には僕も度々見参した。十七八歳ぐらゐの可愛げな娘であつた。福島県の郡山在三春辺に開成山といふ所がある。如何なる因縁でか旧久留米藩の士族がこの辺に移住開墾した土地である。其処の某の娘、田舎育ちではあるが、士族の家筋で相当の教養もあり、容貌も上品であるからと、何人かゝ推奨したのに動かされ、写真で見合ひをして、双方めでたく縁談が結ばれた。：（中略）：結論を言へば、彼は新婦の無学にして、良人を理解する能はざるに不満であつて、二三月間懊悩していたが、遂に破鏡を決心して、而も母にも諮らず、本人にも告げず、一度里帰りをして来いと機嫌よく上野の停車場まで送つて行つて、すぐ其あとから離縁状を郵送したのである。⁽³⁾

これに対し幸徳秋水の従妹岡崎てるは、次のように述べて小泉三申と若干の違いを見せている。

其頃、秋水兄は福島県三春辺から旧久留米藩士族の娘を嫁にもらつた。それも自分自身が見合ひに行つたので、も自分で定めたのでもなく、中江時代の友人森田さんが好いといふのを、君が宜ければそれだといふと簡単に結婚して了つたのである。名は朝子^{アサコ}といひ十七歳、父なる人は維新後に東北へ移任した士族であつた。素直な可愛い人で、多治子伯母には気に入つてゐた。兄も時々、お朝さん、跣足で歩くものじゃないぜ、などと足袋をはかずにゐるのをからかったりしてゐたといふ。別に憎むわけではないけれど、ただ年少の折りから女の味を知つて吉原通ひに夢中になつたこの人には、うぶな娘では嫌らなかつたのであらう。暫くして従弟の安岡友衛に頼み、その

人を故郷へ送り届けさせ、すぐあとから三下り半を郵送したのである。⁽⁵⁾

若干の違いとは「一度里帰りをして来い」と言っただけで、実家に帰ったのか、従弟の安岡友衛に実家まで送り届けても良かったかである。「使いた友衛は、私の祖母安岡千賀子に『なんで怪しからん使いにいったか』と言っただけで、大変に叱られたさうな」と、岡崎てるは続いて証言しているから、岡崎てるの方が正確であろう。

この結婚は元来親孝行のためにしたこと、そしてこの嫁は母親に気に入られており、離縁後、母親は「毎日泣いていた」と小泉三申は記している。また幸徳秋水が師岡千代子と再婚した後でも、「始終、あの子が居たらと言っただけで、あの子を懐かしが」り『あの子がゐたら達者な人だったから子供も生まれたであろうし、子供さえあったら伝次もあんな騒動はすまいに』⁽⁶⁾と言っていたもの⁽⁶⁾だそうである。

実は幸徳に子供はできていたのである。しかしそれは秘密にされたままだったので、幸徳をはじめ誰一人知るところとならなかった。後の幸徳研究者どころか関係者にすら知られなかったのである。

幸徳秋水は美人至上主義者であった。小泉三申は、「秋水は常に僕に語って、妻は美貌を以て第一の条件とする、其他の如何なる長所があつても、美人ならざればたか⁽⁷⁾（たかは土佐言葉なり）で愛情を生じない……おれは飽くまで美人主義を固執すると主張した」と証言している。最初の妻が理不尽にも離縁されたのは不美人だったからであるが、この結末がけしからんだけではない。初夜時から幸徳はけしからん男だった。新聞記者仲間だった松井広吉（柏軒）は、次のように証言している。

其夜或る楼で余と落合つた、余は其結婚式に列しての帰途茲へ舞込んだので、更に秋水を発見したので、驚い

て訳を問ふと秋水は口直しに來たのだといふ、其打明け話しに、彼女は極めて忠実なので非常に母の氣に入り、自分が女中式の女など真ッ平といふのを強て結婚しろといふから、余儀なく今夜三々九度の式を挙げたが我慢出來ずに飛出したのだといふのだ。⁽⁸⁾

結婚してみたが花嫁が不美人だったので妓楼での「口直し」となったというのだから、開いた口が塞がらぬではないか。

美人至上主義ならそれもよし。それなら見合いをしてきちんと確かめればよかつたのである。一旦結婚したら、それが小泉三申のいう「見ずてん結婚」でも、幸徳には責任が生じる。それなのに彼の離縁の仕方は、なんであろうか。まして幸徳は被抑圧人民、当時の言葉で言えば平民の解放を唱える社会主義者ではないか。

民衆の解放、利他のために一身を犠牲にする社会主義者には、一般民衆より高い道德性が要求される。しかし幸徳の男女関係のモラルは、社会主義者の風上に置けないどころか、一般民衆のレベルと比べても低劣なものであつた。

幸徳は最初の結婚の失敗に懲りて反省したであろうか。残念ながら「否」である。二度目の結婚は師中江兆民らのすすめであつた。最初の妻が不美人のうえに無学なのに懲りた幸徳の二度目の相手は、国学者師岡正胤（もろおかまさたねり）の娘で、英語、フランス語も出来る才女であつた。夫の原稿を読み浄書するくらいはたやすいことであつた。しかし美人ではなかつた。

今度は見合いをしたのに、きちんと確かめなかつた。小泉三申は、次のように述べている。

縁談が成立すると聞き、美人か、美人らしい、らしいは変だ能く見たか、見合いはしたが俯向て居たから能く

は見ない、立って行く時の背ろ姿は、すらりとして美人型であった、きさまは馬鹿だな、復た失敗の覆轍を踏むなど、こんな議論を上下して後、程なく当日となった其日没時頃、彼はあたふた僕を引出しに来て、愛宕山下の料理屋の二階へ上り、これから大に飲で吉原へ付合てくれといふ。何だきさまは今夜婚礼ではないかと問ふと、それが大失敗だ、きさまの予言適中して遂に覆轍を踏むだ、今日能く見ると光武の陰麗華が斉王の無鹽だから喫驚した、これから吉原へ夜遁げをして二三日居続けをしたら、新婦も喫驚して逃げ戻るだらう、互ひに喫驚箱を明けるから結婚の自然消滅だと、酒が廻るに従って気炎が高くなる。⁽¹⁰⁾

幸徳秋水の女性問題

師岡千代子と結婚している時代に、幸徳秋水は女性問題で過ちを犯す。赤旗事件（一九〇八年六月二日）後、妻千代子を郷里高知の中村に残したまま、幸徳は単身上京し、最初は柏木に、次は巢鴨に借家して「平民社」と称していた。男手一つの生活では不自由であろうと、同志の岡野辰之介が妹のテル子を女中代わりに住み込ませてくれた。それに幸徳は手をつけたのである。兄の岡野辰之介は酒を飲んで幸徳のところへ怒鳴り込んだり、幸徳の妻千代子に「亭主をとられるぞ」と腹いせの手紙を出したりした。幸徳のスキヤンダルは同志の間へうす汚く広がってゆき、運動の統領としての尊敬の念は急速に薄れていった。

明治社会主義の一方の潮流であったキリスト教社会主義者は、男女関係に極めて厳しかった。その代表は安部磯雄で、その安部が会長であった社会主義協会の入会式の様子を、若き社会主義者の荒畑寒村は、次のように述べている。

私は三十七年の一月、上京してはじめて社会主義の演説会を傍聴し、またはじめて堺、幸徳、安部磯雄、木下尚江、西川光二郎氏らの風貌に接した。……私はもちろんその場で入会し、マルクスの像を浮彫りにした円いニッケル製の徽章を胸につけて内心すこぶる得意であった。今もなお想起するを禁じ得ないのは、演説会の後で青年会館の一小集会室に開かれた新入会員歓迎会の趣きが、恰もキリスト教の大挙伝動に際して開かれる求道者の歓迎会に、いたく似通っていることであつた。

会長の安部磯雄氏から歓迎の辞とともに、会員は常に操行を正しく苟くも粗暴のふるまいがあつてはならぬ、殊に男女間の関係において謹慎すべき旨の注意をうけたのは、いよいよもってキリスト教的であつた。⁽¹¹⁾（傍点辻野）

このような考えの安部から見れば、幸徳の男女関係は論外であつた。安部は病床生活四年の最初の妻を死別後一年にしての堺利彦の再婚に対してすら、あまりに早すぎると激怒し、運動上の関係を断つた。堺利彦は周知のように幸徳と共に平民社を設立した最大の同志であるが、堺の再婚はなんらやましいものではなかつた。堺は結婚式の後、新妻為子の郷里金沢へ旅行して彼女の親類縁者に挨拶するのに先立ち、亡妻の兄堀紫山の所へ出向いて、挨拶するのを忘れないほどこきちんとしていた。

その堺に、妻を亡くし延岡為子と再婚するまでの間に、次のようなことがあつた。回想者は彼女と共に平民社に住み込んで台所などの手伝いをしていた松岡文子、後に西川光二郎と結婚した西川文子である。

この前の奥さんは堀紫山という『読売新聞』の記者だった人の妹さんであつたが、病死されたので。真柄さ

(12) んの守をしていたお勝さんという人と同じ蚊帳で寝ていた時、よほど心が動いたけれど、一度関係すれば責任を取らねばならぬと考えて忍耐したと言われたことがあった。(13)

同じ唯物論派社会主義者で平民社の創立者でありながら、女性に対する態度は天地の相違がある。幸徳が同志の信頼を失っていったのは、当然のことである。その幸徳の権威失墜を決定的にしたのは、管野スガとの同棲である。

管野スガは従来「男から男へ転々とする」妖婦的な革命家とされてきた。しかし大谷渡氏の克明な研究(14)によれば、管野スガは師の小説家宇田川文海の導きのもとに、最初はキリスト教に、後には社会主義にまで進んだ真摯な女性解放家であった。その管野スガが赤旗事件に巻き込まれた。管野は事件のごく近くまで内縁の夫婦生活をしていた荒畑寒村が検挙されたので神田署に面会に行ったところを逮捕、起訴された。管野は裁判で無罪となったものの、二カ月以上も拘禁された上、勤務先の毎日電報社を辞めなければならなかった。

荒畑寒村は官吏抗拒罪および治安警察法違反として重禁固一年半、堺利彦と山川均は重禁固二年、大杉栄は前科一年半を通算して重禁固二年半であった。半年前の金曜講演会の屋上演説事件(一九〇八年一月一七日)も似た騒ぎであったが、その際は、堺、山川、大杉は治安警察法違反で軽禁固一月半であった。それに比べると赤旗事件は信じられないほどの厳罰であった。

赤旗事件によって硬派社会主義は壊滅した。そればかりではなかった。西園寺内閣は社会主義に対する取締がなまぬるいとして退陣に追い込まれ、代わって山県有朋直系の反動的な第二次桂内閣が生まれた。

赤旗事件の時、幸徳秋水は郷里高知中村で病を癒しつつ、クロポトキンの『麵麩の略取』の翻訳にとりこんでいた。

そこに勤務先の『二六新報』にいたため危うく難を逃れた守田有秋から「サカイヤラレタスグカエレ」との電報が飛び込んできた。その後新聞などで事件の詳細を知るや、幸徳は病の身をおし、妻千代子を残して上京した。

幸徳は、すでに述べたように、最初は柏木に、次には巢鴨に借家して「平民社」と称していた。その幸徳の前に管野スガが現われた。管野は裁判で最終的には無罪となったものの、二カ月余りの拘禁中の取り調べの過酷さの恨みは骨髓に徹していた。それは面会に行った同志に、「着物や、金子の差入れは何うでも好い。入監以来受けし圧虐に對して何うか復讐して戴きたい⁽¹⁵⁾」と言わしめたほどであった。

幸徳の前に現われた管野スガは美人であった。荒畑寒村は、「色こそ白かったがいわゆる盤台面で鼻は低く、どうひいき目に見ても美人というには遠かった⁽¹⁶⁾」と言っている。しかし築比地仲助は、「管野は相当な美人であった⁽¹⁷⁾」と証言している。寒村の発言はわざとけなしているとしか思えない。美人であったかどうかは、残されている彼女の写真を見れば判断できることである。

美人であったかどうかはともかくとして、彼女が魅力的な女性であったことは、異口同音に語られることである。後に管野スガらの大逆事件に連座することになる坂本清馬は、「明治の女性には表情というものがなかったが、管野さんは生き生きとした個性的な表情が溢れていた⁽¹⁸⁾」と述べている。「どうひいき目に見ても美人というには遠かった」と酷評した荒畑寒村ですら、「それにもかかわらず身辺つねに一種の艶冶な色気を漂わせていた⁽¹⁹⁾」と、告白している。

この管野スガと幸徳秋水が恋愛関係に陥った。二人の恋愛関係、いや正確に言えば肉体関係が何時頃生じたか、即ち幸徳が妻千代子を離縁した一九〇九（明治四二）年三月一日より前か後かは重要な問題である。『幸徳秋水研究』

(青木書店) と『管野スガ』(岩波書店) という著作のある、この分野の研究の第一人者の絲屋寿雄は、二人が共同して『自由思想』(第一号の発行は五月二五日) を発行し始めた頃のこととしている。当事者の管野が大逆事件の予審尋問で次のように答えているのが、その根拠であろう。

問 被告ハ当時何人カノ妻ニ為リ居ルカ

答 幸徳伝次郎ノ妻デス

問 何時カラ幸徳ト左様ナ関係ニ為ツタカ

答 昨年六月カラデス

問 如何ナル動機カラデアルカ

答 幸徳ガ平民社カラ雑誌「自由思想」ヲ出シテ居テ私ハ其手伝ヲ仕其署名人ニ為ツテ居タノデスガ左様ナ処カ

ラ幸徳ト関係ガ出来マシタ⁽²⁰⁾

一方の当事者の幸徳も、「私は愈々管野と夫婦になることに致しました。是まで何の関係もない時から、世間からはいろいろ評判も立てられ悪口も言はれましたが、却つて夫れが為めに真当の関係を生ずるやうになったのです⁽²¹⁾」と、母の多治に手紙(一九〇九年九月一九日付)で釈明している。

しかし筆者は、幸徳と管野が愛人関係になったのは、幸徳が妻千代子を離縁する前であり、二人が愛人関係になったことが妻千代子を離縁する大きな要因になったのではとの推測を禁じえない。事実当時幸徳の家に住み込んでいた坂本清馬は、一九〇九年一月のこととして、次のように述べている。

そうこうしているうちに『麵麩の略取』はできあがった。送るべき所にはすっかり送ってしまってから、この本の出版を届けるかどうかで、秋水と口論がおこった。私は方に一つも、この本が認可になる筈はないし、もし見つかったら、発行者は平民社であり、発行人は坂本清馬となっていて、私が刑を受ければそれですむ。私の責任でやるのだから、何も届け出る必要はないと言った。しかし管野さんは「万一認可されるようなことがあったら」と言う。すると秋水もそう言う。二人はもう、そういう関係になっていたのだから仕方がない。御本尊が言うんだから仕方がないと思って届け出をした。届ければやられることは決まっているようなものだ。届け出ると早速、警部と巡査が二人「差押えに来ました」と言ってやって来た。一月の末の頃のことだったろう。⁽²²⁾

幸徳は千代子の姉松本須賀子（夫安蔵は名古屋控訴院判事）に、一月二日、二月一四日付けで次のような手紙を出している。

妻としては私の運動に同情し、私の地位を呑込んで、常に私を激励して死処を得るやうにして貰わなければ困るのです。左なきだに心弱き婦人で、動もすれば手足まといとなる恐れがある上に、若し他から種々と革命の危険を説かれ、損害や悲惨を論ぜられて忠告を受けると、常に夫の事業を掣肘し、志気を阻喪せしむることにものなるかも知れぬのです。夫れ位なら寧ろ妻なきに如かずです。……若しあなたが千代の前途を慮る為に、どうしても革命運動を厭ふべきものと御考へならば、只今の中に断然私との関係を断つの外はありません。左すれば今の中ならば、まだ年も若いし又何かと前途の方法も立つかも知れずまい。

右の次第で、私に対する毎度の忠告は感謝しますけれど、今度千代が立寄りましても、彼の志気を阻喪せしめ、⁽²³⁾

従って私の前途を掣肘するやうな御忠告はないことを希望します。若しひどく千代の前途を御心配ならば、其儘此地へよこさないやうに願って置きます。

私は革命家としての妻ならば持ちますけれど、左もなくては千代の来るのを望みません。だから今度は矢張戦場へよこす気で御遣しを願います。……只余命いくばくもなく前途の分かった一身の為めに、彼れを苦しませるのは如何にも忍びないので、今の中に彼れの安穩に生活し得る方法が立つならば、如何ようにも彼れの心任せに致します。⁽²⁴⁾

社会党の婦人連も矢張尾行巡査をつけられて居りますが、千代だけはまだ遁れて居ります。併し此儘に行けば今に札付の革命婦人として、一番先に引はられる運命を持って居ります。就ては先日千代が申上た通り、全く小生と分れ、革命運動の中心より遠ざかる事が安全利益で、且御宅の方にも累を及ぼす心配がなくてよいと存じます。(中略) 戸籍などいふことは小生等にとって何等の意味もないことで、若し意味ありとせば其は唯だ婦人を束縛して奴隷にするといふだけです。当人とあなたとの迷惑と束縛を解く為めには復籍はつらいのです。⁽²⁵⁾

この手紙によれば、千代子が革命家の妻に相応しくないということと、政府からの迫害の累が千代子に及ぶのを防ぐためというのが離縁の主因のようにみえる。しかし母多治への九月一八日付の手紙では、次のように述べている。

母上様にはまだ詳しく申し上げませんでした。実はお千代を離縁したのは、只政府の迫害や、姉さんの干渉があつたばかりでなく、何年来二人の間が面白くない、いつまでも誠の情愛が出ないから左ういふことに決したので、是れは全く仲人の言ふことを真に受けて、見ず知らずの人と結婚し大に思わくが違ったからです。此事は

離縁の時にお千代にも十分にいひきかせて置きました。お千代の氣質が私とは合はない。うそばかりいふので面白くないから、是れまで幾度も離縁しやうとしたことは、母上様もご承知のこと、思ひます。今でも姉さんやお千代も元の通りなることもあるかと思つて居るやうですけれど、一処に居れば氣に入らぬことだらけで、どうしても末の見込みはないことは分かつて居りますから、初めから愛情がないから今度は銘々の思ひ通りにしやう、其代り食うことだけは世話するといふ約束で別れたので、本人も夫れを承知して居たのですけれど、余り氣の毒だから外へは此事は言ひませんでした。⁽²⁶⁾

政府の迫害の累を及ぼさぬためというのは、大逆事件で獄に入れられてからの幸徳の千代子に対する面会、差し入れ等、種々の依頼から考へて、建前の言辞としか思えない。

幸徳は別れた妻千代子にいわば「死に水」を取つてもらつた訳で、迫害の累を及ぼしたくないからとして無理矢理離縁を承知させた妻に、何と虫のよいことよと思える。幸徳の本音は母宛の手紙の中の説明に出ていると言ふべきであらう。ただそこに抜けているのは、「何年来二人の間が面白くない、いつまでも誠の情愛が出ない」ところに魅力的で革命の同志ともなりうる管野スガが出現したから妻千代子を無理矢理離縁したのが真実であるということではないだろうか。

管野スガは六歳年下の若き社会主義者荒畑寒村と内縁の夫婦関係にあつた。それは、管野が「としのはじめ」⁽²⁷⁾で公表して以来、同志間では周知の事実であつた。一九〇七年一〇月以来勤めた『大阪日報』をやめて、荒畑寒村が一九〇八年三月帰京してきた時には、二人の関係は冷却しており、同居はしていなかつた。寒村が在阪中に管野の過去の

男女関係⁽²⁸⁾を知り大いに悩んだのが、その原因である。

菅野スガは、後の大逆事件での予審尋問では、次のように答え、荒畑との関係はきちんと切れていたと述べている。

問 併シ当時被告ハ荒畑勝蔵ノ妻ナリシニ非ズヤ

答 然ウデハナイノデス 荒畑ト曾テ関係ハアリマシタカ明治四十一年中私ヤ荒畑杯カ錦輝館赤旗事件デ入監スル以前ニ最早互ニ承諾上デ荒畑ト分レ別居シテ居マシタ

然ル処赤旗事件デ神田警察デ勾留中荒畑ハ巡查ニ裸体ニサレ蹴ラレ凌虐ヲ受ケタノデ私等ハ可愛相ニ思ヒ皆ンナテ泣キマシタ 其時私ハ大ニ荒畑ニ同情ヲ寄セ慰メテ遣リマシタガ左様ナ処カラ私ハ荒畑ノ妻タト警察デ申立マシタ 私ハ無罪ニ為ツタガ荒畑ハ有罪デ千葉監獄ニ服役中差入ヲスル便宜上カラ矢張私ハ荒畑ノ妻ト名乗ツテ手続ヲ仕マシタ

然ウ云ウ訳故幸徳ト関係スル前荒畑トハ既ニ関係ヲ断ツテ居ツタノデアリマス⁽²⁹⁾

しかし菅野の言い分を額面通りには受けとれない。百歩譲って菅野の側でそう思っているとしても、獄中の寒村はそうではなかった。寒村は次のように述懐している。

私との面会や書信の授受は菅野が当たっていた。やや冷却していた私たちの関係は、この事件⁽³⁰⁾が起って以来ヨリのもどった形で、彼女は内縁の妻として身分帳にも記載されていた⁽³¹⁾。

後に菅野と愛人関係になる幸徳秋水でさえ、菅野と親しくしていた坂本清馬に次のように注意している。

ある日、私は菅野さんと一緒に外出して夕方帰ってきた。すると秋水が部屋に入って来た。坐りもせず立った

ままで、ふところ手をして「君はこのごろ非常に煩悶しているようだが、管野さんを恋しているのではないか。管野さんは君も知っている通り、荒畑君の細君だ。しかも荒畑君は赤旗事件で監獄に入っている。こんな場合に間違ってもあったら、第一僕が同志に対してすまぬ。ラブ・イズ・ブラインドということもあるので、よく注意したまえ」と言った。⁽³²⁾ (傍点辻野)

注意を受けた坂本は、憤然として幸徳宅を飛び出した。坂本が幸徳と再会したのは、同じ大逆事件の被告としてであった。

坂本にこのような注意をした幸徳が、管野スガと愛人、内縁関係になり同棲したのである。赤旗事件の獄中でこの報せを聞いた大杉栄は、「秋水は獄中の同志から愛人を奪ったのだ、管野は陣笠^{じんがさ}から首領^かにのり替えたんだ⁽³³⁾」と吐き出すように言ったとのことであるが、大杉ならずともだれしも同じように思った。

一九〇六(明治三九)年三月一五日の市電運賃値上げ反対運動による凶徒衆集罪で懲役一年半の獄中生活を終えた吉川守圀は、一九一〇年一月二二日、詰問のため幸徳を訪問した。その様子は、吉川の記すところによれば、次の如くであった。

筆者は座に着くや否や早速管野問題に就いて可なり鋭く突込んだ。幸徳も、そして其の傍にゐた管野も暫らくじっと無言であったが、やがて幸徳は如何にも困ったような面持ちで、「実は此の問題では、山口も赤羽も先日出獄すると直ぐやって来て、君と符節を合するやうな詰問をして行った。赤羽は散々僕を罵り散らし、席を蹴つて帰りざま僕に対つて、男ならば恥を知れと繰返し云つてゐた。僕は謹んで承った。君の言も亦謹んで承り置く。

僕は今同志から悪魔の如く云はれてる。あれ程親しくしてゐた為子⁽³⁴⁾や保子⁽³⁵⁾も——イヤ誰れ彼れといふ差別なしに皆が絶交して来た。まったく在京の同志は全部を挙げて僕に愛憎尽かしをしてゐる形だ。⁽³⁶⁾

幸徳秋水が四面楚歌になるのは当たり前前のことである。首領が子分の、しかも獄中にいる子分の女を取るとは、ヤクザの社会でも許されないことである。しかも幸徳は、同志愛をこの上なく強調する社会主義運動の首領ではないか。幸徳は、この一事を以てしても、指導者失格である。

大逆事件における幸徳秋水

さて幸徳と内縁、同棲関係に入った管野スガは復讐に燃える女であった。その管野の前に、熟練の機械職工宮下太吉が登場してきた。宮下は「爆裂弾ヲ作り、天子ニ投ゲツケテ天子モ吾々ト同ジク血ノ出ル人間デアルトイフコトヲ知ラシメ、人民ノ迷信ヲ破⁽³⁷⁾」らねば、社会主義も実行することができないと確信していた。この二人に、幸徳、管野の推薦で、新村忠雄、古河力作の二人が加わり、天皇暗殺の計画が進められていった。

幸徳秋水については、大逆事件はデッチアゲだ、無実だという説があるが、そんなことはない。幸徳は、宮下に対し、新村と古河を推薦している。また宮下の依頼で、爆弾の詳細な製造方法を元自由党の運動家奥宮健之から聞き、新村を通じて宮下に教えている。一九一〇（明治四三）年の元旦には、宮下が信州からはるばる千駄ヶ谷の平民社を訪ねてきた。この時宮下は、持参した空罐を畳の上に投げて試してみたが、管野や新村のみならず幸徳も投げてみた。この日、幸徳は勅題「新年雪」に因んで、「爆弾の飛ぶよと見てし初夢は千代田の松の雪折れの音」との歌を詠んで

いる。

天皇暗殺の大逆計画の発意者は宮下太吉であったが、幸徳がその中心的立場にあったことは間違いない。ところがその幸徳が態度を変え、計画を積極的に進めようとはしなくなる。幸徳の弱気を見た新村忠雄は、一月二三日、幸徳を除外しての計画の実行を古河力作に提案して賛同を得ている。

その頃社会主義運動の外側では、幸徳秋水の旧友小泉三申や細野次郎⁽³⁸⁾が幸徳の身を案じて、『通俗日本戦国史』の編纂を勧めた。幸徳の一九一〇年四月三日付吉川守園宛書簡によると、細野はこの計画に「二千円程出しさうな話であつた」⁽³⁹⁾。幸徳は『通俗日本戦国史』編纂計画に乗り気になった。彼が立てた計画は、北条早雲の勃興から信長、秀吉を経て家康による海内統一に至るまで、全一〇巻、各巻一〇〇〇ページ、編集経費約六〇〇〇円、編集員三名、事務員一名、三年完成というものであった。この仕事に助手として管野スガを使えば、生活の経済上の困難を解決できるばかりでなく、管野を大逆計画から離脱させ、それによって大逆計画を自然消滅させることができると考えた。幸徳は、第六回の予審調書によると、次のように述べている。

問 同年（一九一〇年）一月以後其方はどんな考えをもっていたか。

答 私は、社会主義のためには知識上の伝道がもつとも必要があると思っておりました。なお私は、中江兆民の哲学を祖述したいと思ひ、その資料を集めておりました。そのような次第で、いま自分が宮下らの運動に加わって倒れるのは主義のためにも利益でないと考えました。また忠雄も、先生のような人は知識上の伝道をやるほうが主義のためにもよいから、今回の計画から退いたほうがよからうと申しました。私は管野が幼少のと

きから逆境に育ち、戦闘的な生活ばかりしてきた女であるから、今後は平和に生活させてやりたいと考えましたので、同人も今回の計画から退かせようと思ひ、そのことを同人に話したことがあります。それ以来私の態度が自然明瞭を欠くようになったのです。

問 それでは宮下、古河、新村の三人に実行させようと思ったのか。

答 私と管野がその計画から身をひけば、自然忠雄も退くであろうと思ひました。また古河の態度が冷静でありましたから、われわれの進退をみれば、あるいは実行をやめたかも知れません。宮下は自分一人でも実行すると言っていたそうですから、結局宮下一人が実行することになったかも知れません。⁽⁴⁰⁾

幸徳は家財を処分し、一九一〇年三月二三日、管野とともに湯河原温泉天野屋旅館に落ち着いた。しかし『通俗日本戦国史』執筆は、「応仁の乱の所あたりから、近世史を書き出して、北条早雲の所を書き終った所⁽⁴¹⁾」で中断した。出版計画に対する小泉と細野の資金援助が実現しなかったからである。

小泉と細野が幸徳に対する約束を守らなかった理由について、神崎清は「二人とも有名な相場師で、景気の変動がはげしかったから、秋水をだますつもりはなかったと思う⁽⁴²⁾」としている。しかし小島直記は「三申は、秋水がやられることをこの二ヶ月間に知ったのではあるまいか。後世のいわゆる『大逆事件』追及を決定した当局の方針をかぎつけ、資金提供を打ち切って、シンパとしての連累をさけたのではあるまいか⁽⁴³⁾」と推測している。確たる証拠があるわけではないが、私は小島説に共鳴を覚える。

それとはかく、大逆計画から自らは離脱、管野は救い出し、それによって大逆事件を自然消滅ないしは宮下一人

の企てにしてしまう試みは、間に合わなかった。

大逆事件は宮下太吉が職場の同僚の妻と起こした姦通事件のもつれからばれてしまい、宮下太吉は五月二五日に逮捕された。その新聞報道を見て、「困った事をしてくれた」と同宿の田岡嶺雲に語った幸徳秋水も、六月一日には逮捕された。管野スガは、五月一八日に『自由思想』の新聞紙条例違反事件の換金刑で入獄していたので、獄中で起訴されることになる。

幸徳秋水が大逆事件に対してとった態度は、後に弁護を引き受けてくれた今村力三郎弁護士から「半途脱退⁽⁴⁴⁾」と評された。「半途脱退」とは言い得て妙な評言であるが、指導者としての幸徳は、絶対に「半途脱退」の態度はとるべきではなかった。

荒畑寒村は次のように述べている。

個人的テロリズム、あるいは一揆暴動主義には、秋水はあくまで反対しております。秋水は獄中から磯部四郎、花井卓蔵、今村力三郎の三弁護士に意見書を出していますが、その一節の「革命の性質」を説明した中では、革命とは旧来の制度組織が朽廃衰弊の極、崩壊し去って新しく社会組織が起り来る作用をいうので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉に外ならないと言っています。(中略)

それなら、なぜ、秋水は最初に陰謀をたくらんだ同志に向かって、極力阻止しなかったのか。秋水の同志間における信望をもってすれば、襟を正し言を尽くして諫止したならば、死んだ子の年を数えるようなものかもしれません⁽⁴⁵⁾が、思いとまったのではないかと私は思うのであります。

大逆事件の首謀者だった管野スガは、獄中の記録「死出の道草」の中で「幸徳、宮下、新村、古河、私、と此五人の陰謀の外は、総て煙の様な過去の座談を、強めて此事件に結びつけて了ったのである⁽⁴⁶⁾」と述べている。また幸徳秋水の弁護に当たった今村力三郎は、「幸徳事件に在りては幸徳伝次郎管野スガ宮下太吉新村忠雄の四名は事実上に争ひなきも其他の二十名に至りては果して大逆罪の犯意ありしや否やは大なる疑問にして大多数の被告は不敬罪に過ぎざるものと認むるを当れりとせん⁽⁴⁷⁾」と述べている。大逆事件では、死刑二四名（内半数の一二名は判決の翌日、天皇の思召しによって無期懲役に減刑）、懲役一一年一名、懲役八年一名であった。無期懲役に減刑された者も、二名は獄中で縊死、三名が獄中で病死した。無残としか言いようがない。もし幸徳が、荒畑が述べたような態度をとっておれば、彼らのほとんどを大逆罪から免れさすことができたはずである。

幸徳が処刑される二、三日前、沼波政憲教誨師に対し、「私が死刑の執行を受くるは事件の成行上止むを得ぬ所であるが、唯気の毒に思ふのは我々と共に死刑宣告を受けた人々である。かれらの中には親のあるものもあり、妻子のあるものもある。今更何といふたところで致し方がない。同じ船に乗り合わせて海上難風に遭い、共に海底の藻屑となったと諦めて貰うより外はない⁽⁴⁸⁾」と語ったと伝えられているが、死刑になったり無期懲役になったものほとんどは、幸徳と「同じ船」に乗ってはいなかったのである。大逆事件とは無関係で、完全に冤罪である。「半途脱退」の態度しかとらなかつた幸徳は、彼らを道連れにしてしまったのである。

管野や宮下を諫止しないのであれば、幸徳は大逆事件の中心に位置して、最後まで同志と行動を共にするべきであった。それが復讐に燃える若い愛人にずるずる引きずられ、あるいは若い愛人に気兼ねして、毅然たる態度をとれ

なかったことは指導者失格であった。

幸徳秋水は死刑判決の翌日（一九一一年一月一九日）、堺利彦に「まづは善人栄えて罪人滅ぶ。めでたし／＼の大団円で、僕も重荷を卸した様だ。今日は気も心ものびやかに骨休めして居る。これから数日間か数週間か知らないが読めるだけ読み、書けるだけ書てそして元素に復帰することにしよう⁽⁴⁹⁾。」と便りを出している。その二日後には、「愈々何も角も千秋楽となった。おれも肩が軽くなつたやうに覚える。死といふ者は高山の雲のやうなもので、遠方から眺めると大した怪物の形にも見えるけれど、近づいて見れば何でもないものだ。唯物論者には、左右に振て居た柱時計の振子が停止したより以上の意義はない⁽⁵⁰⁾。」と小泉三申に書き送っている。一月二二日には、面会にきた堺利彦や大杉栄らに「幸徳というやつ、どうしてあんなばかな事をやったかと、今から一〇年二〇年に思ってくれる者があれば、それで自分は満足する⁽⁵¹⁾。」と語った。

死刑執行は、その二日後の一月二四日であった。死刑執行に立ち合った沼波政憲教誨師は、幸徳は従容と死についたと語っている。幸徳は処刑されて幸福だった。逮捕の一〇日程前、別れた妻師岡千代子に「運動の方も僕が刀折れ矢尽きたので今は全滅の姿だ⁽⁵²⁾。」と便りし、逮捕されてからは、「僕は昨年来失敗だらけで君が帰つて見て嘸ぞ驚いたらう。創痕殆んど完膚無く、四面楚歌の中で相談相手になるのは一人もないのだから……⁽⁵³⁾。」と、堺利彦に手紙を書いていた。

「病気は到底不治なので……マア三年か長くて五年の寿命⁽⁵⁴⁾」の幸徳秋水にとって、女性問題で四面楚歌になり、指導者としてとるべき態度を大きく誤って多くの同志とその家族に償いようのない負い目のできた幸徳にとって、死刑

はむしろ救いであった。従容として死ねたのも、ある意味で当然である。そして処刑されたことによって、一〇年後二〇年後どころか、八〇年後の今日でも忘れられず、文部省検定の教科書に載るようになつたのである。以て瞑す可しである。

- (1) 『明治バベルの塔』(新芸術社 一九八九年) 所収。
- (2) 師岡千代子「風々雨々——幸徳秋水と周囲の人々——」『幸徳秋水全集』別巻1(明治文献 一九七二年) 四四〇―四五頁。
- (3) 小泉三申「堺君と幸徳秋水を語る」(『中央公論』一九三二年一〇月号) 一七三―一七四頁。
- (4) 横田ルイの別名。
- (5) 岡崎てる「従兄秋水の思出」(『幸徳秋水全集』別巻1) 二三七―二三八頁。
- (6) 同書 二三九頁。
- (7) 小泉三申 前掲論文 一七四頁。
- (8) 松井広吉「四十五年記者生活」抄(『幸徳秋水全集』別巻1) 三六六頁。
- (9) 幕末、明治期の国学者。文久三(一八六三)年二月二日、尊氏ら足利三代の木造の首を三条河原にさらす事件を同志と共に起こした。

- (10) 小泉三申 前掲論文 一七五頁。
- (11) 荒畑寒村「寒村自伝」上巻(岩波書店 一九七五年) 九二頁。
- (12) 堺利彦の長女。
- (13) 西川文子「平民社の女」(青山館 一九八四年) 七〇―七一頁。
- (14) 大谷渡「菅野スガと石山露子」(東方出版 一九八九年)。
- (15) 『熊本評論』第二七号(一九〇八年七月二〇日) 一頁。
- (16) 荒畑寒村 前掲書 一八四―一八五頁。

(17) (18) 絲屋寿雄『管野スガ』(岩波書店 一九七〇年)二二二頁。

(19) 荒畑寒村 前掲書 一八五頁。

(20) 清水卯之助編『管野須賀子全集3』(弘隆社 一九八四年)二〇七頁。

(21) 塩田庄兵衛編『増補幸徳秋水の日記と書簡』(未来社 一九六五年)三二四頁。

(22) 坂本清馬『大逆事件を生きる』(新人物往来社 一九七六年)五六頁。

(23) 「高知からの上京の途中立ち寄っても」の意。

(24) 塩田庄兵衛 前掲書 二八八頁。

(25) 塩田庄兵衛 前掲書 二九一―二九二頁。

(26) 塩田庄兵衛 前掲書 三一五頁。

(27) 『牟婁新報』第六六四号(一九〇七年一月一日)所載。

(28) 荒畑寒村は、管野の男女関係について次のように述べている。

管野須賀子の履歴はすべて私が後に知ったところであるが、彼女は大阪の生まれで幼少の折から継母まははのために苦しみ、一たび東京の商家に嫁したが故あって離婚した後、鉦山業に失敗して中風の為半身不随となりながらも、朝夕の食膳に贅沢を並べる父親と弟妹とをかかえて、人生の荒波を凌しのいで行かねばならなかった。彼女は大阪の小説家宇田川文海に師事して小説家を志したが、しかし作家として成功し得る才分があったとはどうも思われない。それ故、その名を署しよした幼稚な小説を大阪の小新聞に発表して、やっと一家を支えるだけの金を得るためには、文海の力に頼るとともに貞操をもって支払わねばならなかったのである。(中略)

彼女が社会主義に興味をもったのは、堺先生がまだ朝報社にあった頃、男から暴力で凌辱されて煩悶している一婦人に与えて、それは恰も路上で狂犬に噛かまれたような災難で、不幸ではあるが自己の責任を負おうべき過失ではない、そんな不幸は早く忘れるように努むべきだという意味の文章を、紙上に発表したのを読み、非常に感激して先生に接近したのが動機だという話である。それというのも、彼女自身がまだ少女の折、継母の奸策かんさくで旨をふくめられた鉦夫から凌辱された経験があっ

て、そのため久しく煩悶していたからだ。そしてまた、そういう過去に対する自暴自棄の感情が何ほどか後年の放縦な生活の原因をなしたとも、彼女はみずから告白した。

彼女の田辺来住は単に『牟婁新報』の留守編集主任というに止まらず、柴庵（毛利柴庵^{さいあん}）和歌山県田辺の真言宗高山寺の住職で『牟婁新報』社長兼編集長……辻野）と結婚する約束でもあったのだそうである。もしそれが実現されていたら、彼女の運命もはなはだ異なっていただろうが、来て見ると柴庵には久しく肺患^{かしょう}で臥床^{がしやう}している実際上の細君があることが判つて、憤慨のあまりただちに京都へもどろうと思つたが、柴庵の出獄するまで止まることに口説^{くど}き落とされたい。しかし、その失望と柴庵に対する反発とは私が田辺を去つた後、不在の法友柴庵のために来援した真言宗の雑誌『六大新報』の主筆だった清滝智竜とも情交を結ばせた。要するに、永い放縦^{ほうじゆう}な生活が彼女には習性となつて、みずから反省もし嫌悪もし、そしてその境遇から脱却しようとも思ひながら、何か一つ躓^{つまず}くとすぐまた同じ過失を繰り返させてしまったのだ。（寒村自伝』上巻一八五―一八七頁）

しかしこれが「歪められた管野スガ像」であることは、大谷渡がその著『管野スガと石山露子』において詳しく論駁しているところである。真相は、管野への誤解に基づく中傷を荒畑寒村が真に受け、二人の関係が冷めていったものと思われる。

(29) 清水卯之助 前掲書 二〇七―二〇八頁。

(30) 赤旗事件のこと。

(31) 荒畑寒村 前掲書 二九九頁。

(32) 坂本清馬 前掲書 五六―五七頁。

(33) 荒畑寒村 前掲書 三〇二頁。

(34) 堺利彦夫人。

(35) 大杉栄夫人。

(36) 吉川守園『刑逆星霜史』（青木書店 一九五七年）一九六頁。

(37) 「宮下太吉予審調書」 絲屋寿雄『増補改訂 大逆事件』（三三書房 一九七〇年）一〇五頁。

- (38) 政友会代議士で出版社隆文館社長。
- (39) 塩田庄兵衛 前掲書 三二九頁。
- (40) 塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録・大逆事件』下巻(春秋社 一九六一年)一九一―二〇頁。
- (41) 小山松吉『日本社会主義運動史』(司法省刑事局 一九二九年)五四頁。
- (42) 神崎清『大逆事件3』(あゆみ出版 一九七七年)九〇頁。
- (43) 小島直記『小泉三申』(中央公論社 一九七六年)一一八頁。
- (44) 今村力三郎「芻言」(『幸徳秋水全集』別巻1)五〇六頁。
- (45) 『荒畑寒村著作集5』(平凡社 一九七六年)一七九頁。
- (46) 清水卯之助編『管野須賀子全集2』(弘隆社 一九八四年)二六〇頁。
- (47) 今村力三郎 前掲論文 四七八頁。
- (48) 絲屋寿雄『増補改訂 大逆事件』一九〇頁。
- (49) 塩田庄兵衛 前掲書 三八四頁。
- (50) 塩田庄兵衛 前掲書 三八五―三八六頁。
- (51) 『堺利彦全集』第六卷(法律文化社 一九七〇年)二七二頁。
- (52) 塩田庄兵衛 前掲書 三三七頁。
- (53) 塩田庄兵衛 前掲書 三五〇頁。
- (54) 松本須賀子宛幸徳秋水の一九〇九年一月二日付書簡。塩田庄兵衛 前掲書 二八八頁所収。